

田中復興大臣の「生活再建支援拠点」
東日本ブロック会議ぶら下がり会見録

(令和元年11月8日(金) 17:13～17:20

於) トラストシティ カンファレンス 丸の内Room1)

1. 発言要旨

本日は、「生活再建支援拠点」ブロック会議東日本Aブロックの会議に出席させていただきました。北は北海道から南は岐阜県までの10カ所の方々でございました。拠点の皆さまから各拠点の現状の取り組み課題や、国や福島県への要望などについて御報告をいただいた後、率直な意見交換をさせていただきました。

意見交換の中では、特に復興・創生期間後の避難者支援の在り方、行政との連携体制の構築等について話題となったところでございます。

日ごろ、避難されていらっしゃる方々、特に苦労話なども交えながら、支援者の方々から現在の取り組み状況や課題について意見を伺いました。相当率直なお話もあったわけでございます。今後とも現場主義に立って、被災者の皆さまに寄り添いながら復興に全力を向けて取り組んでまいりたいと、このように思っておるわけでございます。

2. 質疑応答

(問) 苦労話も交えながらということですが、大臣として聞いていて、特に印象に残ったようなお話ですとか、あと、国への要望もあったようなんですが、今後復興庁として手当てしていけるものというのはありますでしょうか。

(答) 大まかなことを申し上げますと、復興・創生期間後における拠点事業を含めた避難者支援施策の継続ということについてお話がございました。また避難者支援に向けた官民の連携体制の構築、また、避難者の情報の把握、これらのことについて御要望いただいたわけでございます。また、国に対してというか、これで10年がたち、新たないろいろな施策に基づく新しいこれからのスタートに当たって、一回総括などしてほしいという御要望もあったところでございます。

(問) 本日団体の方とのお話の中で、例えば最近だったり、避難者の方々からこういった相談内容が今増えているだとか、そういった近況のお話というのはありますでしょうか。

(答) やはり、事細かには一つ一つというわけではないんですが、少し私たちが伺うことができたのは、ひとり暮らしの男性の方の生活面での御苦労だとか、もう10年たつものですから、御家族が亡くなられて、その後にひとり住まいになったとか、それから、や

はり生活に、精神的にもちょっと弱気になられたり、また、ふるさとに帰るといふことについても、意外と御苦労があるなどというようにもお話がございまして、相当やはりきめの細かい対応をそれぞれしていただいているし、また、それぞれ被災者の皆さまもつらい思いがあるんだなということを痛感したところでございます。

(問) きのう復興庁の2021年度以降の基本方針の骨子案が示されましたが、それについて、直接はないのかもしれないですけども、今後の復興庁のあり方に対して、避難者の方から相談が寄せられているのですとか、21年度以降のあり方に関しては、何か今日ありましたか。

(答) 率直に言いまして、今日のお話の中にも、10年で終わるんじゃないかと、こういう心配があったんだということも言っておられまして、これからの10年があるということ、骨子案ですけども、示されて年内にも案がまとまってくる、具体的に財源のことも含めてまとまってくる中に、一安心しつつも、やはり今後のことについて、特に今日のお集まりの皆さまの御意見としては、やはりいろんなケース、相当遠隔地で生活される、また、発災当時とは状況が相当変化している、また、幾つも転居していらっしゃる方もある、こういう状況について、一回やはりきちっと整理してみる必要があるんじゃないかという思いでありましたし、私達ちも心のケアということ、いつも言っておりますけれども、やはりもちろん物のケア、金銭的なケアも必要だと思いますけれども、心のケアというのは、特に歳月が流れて、お年を召された方たちが多くなる、あるいは家族が亡くなられて状況に変化がある、こういう中で、私たちの責任が相当重いものがあるなと。行政のただ一様の対応ではなくて、本当に心の中にまで対応するということはどういうことなのかと、今日もちょっと考えさせられるところが多々ございました。

(問) 確認ですが、骨子案10年延長ということに対して、関係というようにお話はありましたか。

(答) それは、もちろん否定されるような御意見はございませんけれども、やはりその中身については、少しそれぞれの今日御出席の方々の思いがあるんだろうと思います。そういうふうにとちょっと私も思いました。人によって状況、また地域によって状況が違いかもしれません。

(以 上)